

教養教育科目としての『知の理論』入門（岡山大学の事例）

森岡明美・田原誠
(岡山大学) (岡山大学)

国際バカロレア (以下 IB) は高校までのプログラムだが、その教育理論と実践には大学が学ぶべき要素がふんだんにある。中でも、検証的思考力、多角的な視点、多様性を認める心を育成する「知の理論」(以下 TOK) は、日本の教育に欠如している学びの要素であり、大学教育に TOK を導入することは、現在重要課題である教育改革に大きく貢献すると考えられる。

岡山大学では今年度第2学期に、教養教育科目(週2時間×8週間)として、『知の理論』入門を提供した。対象は、IB教育に馴染みのない学生である。考える訓練を受けてきていない学生にとっては、TOKはとっつきにくい科目であると考え、その助走として、第1学期には「クリティカル・シンキング(検証的思考)入門」を提供した。この授業では、まず論理的に考えるために、伝統的な帰納法、演繹法を始め、ビジネスでよく用いられるロジック・ツリーやピラミッド・ストラクチャーで思考練習をした。最初の発表課題は、「岡山または岡山大学の課題を見つけ、ピラミッド・ストラクチャーを使うなどして、論理的に、聞き手が納得できる建設的提案をする」ことであった。そして学期後半は、メディア・リテラシーについて論議した後、論理的検証に加えて、前提を疑い、多面的・多角的に見る見方を養うクリティカル・シンキングについて学んだ。最終発表課題は、「社会で為されている議論や主張について、一見当然と見える前提を疑い、その主張が妥当かどうか多角的な視点でクリティカルに検証する」ことであった。学生たちは、十分に課題をこなしていたが、授業終了後のアンケートでは、検証的な見方をする行動は起こすようになったが、それを学習全般に応用する意識の変容までは見られなかった。

第2学期の「知の理論入門」授業では、本稿執筆者らの著書「知の理論をひもとく」(Inugai-Dixon, et.al. 2017)を教科書に使用し、3つの「知識の領域」(芸術、ヒューマンサイエンス、自然科学)をそれぞれ4時間ずつかけてカバーした。TOKの抽象的な概念自体には時間をあまり費やさず、新聞記事などをTOK思考法で分析した実践例(教科書の第2章)を演習しつつ適宜TOKについて解説した。宿題として学生は、関連領域の素材文のTOK分析(第3章)に取り組む。授業では3人グループで各自の分析を発表し合い、「主張」を見つけ出し、「知るための方法」「個人的な知識～共有された知識」「主張の特性」に関して主張を分析し、最後に「根源的な問い」を導き出す。分析実践を中心としたのは、1学期間の短さという現実問題と、TOKは「語る」ものではなく「実践する」ものという信念からである。

ペアワークやグループワークの際、一見おとなしそうな学生も発言し、積極的に参加しているのが観察された。第2章の実践例を演習する時、学生たちが教科書に既に提示してある解答例を気にしないで、自分たち独自の考えを出し合い分析していたのは興味深く、驚きでもあった。

授業後のアンケートから、履修生たちはもともと考えることが好きで、論理的思考ができていたということがわかった。しかしそのような学生たちにとっても、TOKは新しい概念をもたらし、少し難しいと感じられたようだった。特に、「主張の特性」についての理解度が低かった。

教えてみてわかったことは、「クリティカル・シンキング」は、「知の理論」のための助走としては、あまり役に立たないということである。むしろ、哲学のほうが役に立つかもしれない。ある学生からのコメントには「1学期のクリシン入門と2学期のTOKは、まるで別物のように感じた。1-2学期通してTOKをやってみたかった。同じ題材をクリシンとTOKの2つの見方で見るとどうなるのかも気になる」と記述されていた。また、「抽象的な概念などについて、もっと時間を費やして説明してほしい」という意見も聞かれた。TOKを教えるには、1学期(週2時間×8週間)では足りないと感じたので、来年度は、「知の理論1」と「知の理論2」を2学期にわたり提供する予定である。

結論として、「知の理論」は、ロジカル・シンキングともメディア・リテラシーとも哲学とも異なる内容を提供でき、大学の教養教育科目として、価値があると思う。TOKと日本の大学教育との親和性は高いと感じた。TOKをIBだけに限定せず、大学の教養教育に導入することを他大学にも提案したい。